

## 重戦車が行く '11 春

4日目～7日目：奈古～米子

### < 明日の風 >

4月28日(木)～5月1日(日)

山陰線は、萩～益田間が極端に列車が少ない。益田～米子間はまずまずだ。昨日カットした所は前者に入る。となれば、今日やるべき事は明らかである。「いつかカバーするさ」なんて悠長な事は言っておれぬ。即決即行が重戦車の取り柄だ。動きの鈍さは、決断の速さで補わなければならない。

という訳で、浜田駅始発 5:31 の下り列車に乗った。なんと、奈古駅まで2時間ほどもかかるスーパーローカル列車だった。7:30 に、奈古高校の生徒といっしょに降り準備をした。彼らからジロジロ見られる。田舎では、異様な恰好の私は変人にしか思われまいだろう。

昨日、28日の田万川～浜田 65km は、また辛かった。20km 過ぎの益田から雨が降り出し、浜田まで降られっぱなしだった。びしょ濡れで寒かったけれど、2日連続中断する訳にもいかず、泣き泣き耐えた。何度、悪たれを吐いたか分からない。

これで、雨の日は2勝4敗だ。「あんたも好きね」と昨日で勝ち、「雨は心まで濡らす」、「只者だ」、「雨にも風にも負ける」と一昨日の「逃げるが勝ち」で負けた。いつも負けてばかりではないんだが…。

浜田の10km 程手前の食堂に入ったら、「あんた、ようここまで雨ん中来たねえ。40km 以上はあるよ。今朝、益田の橋の上を傘さして走っているのを見たんだ。」と先客のご夫婦。昨日はこの一言で報われた。「有り難うございます」と言って深々と頭を下げた。

偶然とはいえ、7日間の内に今日(29日)の様な日があると嬉しい。乗り物遠足の気分だ。天気は回復し、気温も上がった。

奈古からサエガ峠を越えて木与、宇田郷に至る。ここの海岸線は、日南海岸を彷彿させる美があった。違うのは波長だ。日本海のは極端に短い。海を見ていて陰鬱になるのはそのせいだろうか。孤独な旅にはどんピシャリと似合う。

長い大刈トンネル、中の須佐トンネルを抜けた下り、上り車線でネズミ獲りをやっていた。レーザーの先端係の人と目が合う。お互いに苦笑い。「お疲れ様っす!」と声をかけ、下って行った。やる方も「やおねえ」わな。蚊に刺されて、悪態つかれて。

須佐～江崎はアツという間だった。一昨日お世話になった「小室屋」の前を通り、江崎駅に到着した。奈古から27km 程だろう。11:27 の上りに間にあったぞ、あと30分もある。と駅の時刻表を見ると、11:27 の上りなんか無い。12:58 となっている。思わず駅員の方に尋ねたら、「そりゃあんた、長門駅の時刻じゃがな。」という返答だった。

急いで時刻表のコピーを取り出し確かめると、大チョンボだと分かった。慌て損だ。

うわあ！あと2時間もある、どうしよう。辺りには、時間を潰す所はなーんにもない。一昨日で証明済みだ。仕方ない、まっ、のんびりいこう。駅の木製ベンチに腰をおろし、一本満足とカレーバーで昼食を摂ることにした。せめて、ビールがあればいいのだが。

バーをムシャムシャ食べていると、でかいトラ猫がノソノソとやって来て、私の前に突き座った。駅の主だろうか、ふてぶてしい面をしている。

「シッ! シッ! コラッ!!」と脅しても、ニャンとも言わない。さては、このバーがお目当てか。一本満足バナナ味を一かけら手のひらに乗せて差し出すと、警戒もせず寄って来てペロリと食べた。まさかカレーバーは食わんよなあ、と思いつつ私が食べていると、じっと睨みつける。「ホラ、これも欲しいんか」と言ってあげたら、「ニャオー」と鳴いて食べよった。

猫がバーを食べている風景は、なかなかイケている。動物は苦手だが、急に親しみが湧いて、私はこいつを「トラ」と呼ぶことにした。

結局、トラと私はバーを5本食べた。春真っ只中、田舎駅舎での小宴会であった。まったりとした雰囲気の中で、確かに「浩然の気」を養った。前に進むだけではなく、後ろに下がることも時には必要だ。私は、今何処にいるのかさえ忘れて、ベンチに横になった。

1時間ほど眠ったろうか。ふと何かの気配がして目が醒めた。トラが枕元に座っている。見守り役をしてくれたって訳か。律義なヤツめ。

仮初めだが友達になったトラ、別れの時刻が迫る。後ろ髪を引かれて、12:58の上りに乗った。旅の終わりには、後頭部の毛はないだろう。

益田で乗り換え、浜田で乗り換え、大田(おおだ)に着いたのは16:04だった。3時間、普通列車に揺られっ放しである。今日は、本物の乗り物遠足だ。総てをうっちゃっておいて、子供達にこんな旅をさせたいなあ。一生の宝になるぞ。

大田市での宿泊は大田スカイホテル、晚餐の足は「東京亭」という寿司屋に向けた。昨日の浜田から3日間は、寿司三昧で行こうと決めたからだ。「山陰寿司三昧の旅」なり。

我が佐伯市には、「世界一佐伯寿司」という面映ゆいキャッチコピーがある。気持は解るが、バカ言っちゃいけない。海があれば、魚がいる。気合の入った職人さんがいれば、必ず旨い寿司があるはずだ。特に山陰は、豊後水道とは明らかに魚が違う。自分の故郷を批判したくはないが、何を基準に「世界一」と言うのかね。過大広告だろ。

店に入ると、「っらしゃーい!」という威勢のいい声がかかった。カッコいい若い板前さんだ。6時前とあって、10席ほどのカウンターは空いている。その中央に腰を下ろした。

女将さんと二代目の息子さんとやっていて、先代のご主人は亡くなったそうだ。熊本出身だが、焼酎は飲まず日本酒ばかり飲んでいたとのこと。それもそのはず、当地には、これまたすばらしい日本酒があるのだ。

昨夜の浜田での寿司はごく普通だったので、今夜はいっちょ奮発して特上を注文することにした。若主人との話しの中で、特上はこの近海で獲れたものしか使わない、と耳にしたからである。

先ず、鮑で度肝を抜かれる。直径20cmほどの大鮑から、厚さ7~8mmのネタに切って握ってくれた。こんな分厚い鮑は初めてだ。トローっと甘い。「この鮑は、70歳のおじいさんが潜って入れてくれるんです。」と彼が教えてくれた。

平目も 60cm 級の天然もので、「ひらそ」も出てきた。どれも頬が落ちそうだ。そして、待ちに待った「のどぐろ」が登場した。これを食べたかったんだよ。

のどぐろは、正式には赤ムツだが、山陰で獲れるのは口の中が黒いので、「ノドグロ」と呼ばれる。上品な高級魚らしく、炙ったものが出た。ねっとりアッサリした味わいだ。一発でファンになってしまった。

箸が進むにつれ、ビールから日本酒に移る。若林酒造の「開春《かいしゅん》純米超辛口」と「開春西田《にした》」だ。

前者は、島根県産米「神の舞《かんのまい》」を使った、極めつきの辛口である。辛口好みを唸らせるほどの、ウルトラドライだった。

後者は、私の後 30 分位にカウンターに座った常連さんから薦められたものだ。「兄さん、日本酒がお好きなら、これ(西田)を飲んでみませんか。」と猪口に注いでくれた。熱爛だが、深く腹に沁みる。すかさず女将さんに冷やで頼み、じっくりと味わってみた。口腔にさわやかさが拡がり、しかも、何か重みがある。凄い酒だった。更に 2 合追加し、先ほどの方と日本酒談議に花を咲かせた。

今宵もすばらしい店、確かな腕の職人、旨い食と酒、それに素敵な人々に出会えてよかった。風に恵まれた、良き日だった。

30 日、土曜日は予定変更し、9 号線キララ多岐という道の駅から渚ウェイに入り、出雲大社へと向かった。予定では、ずっと 9 号線を伝って松江に達するはずだったが、大社を横目に見て行ける訳がない。罰が当たります。

出雲大社は 35 年振りである。サラリーマン時代、取引先が出雲市にあり、出張のついでによく訪れたものだ。何度来ても、ここは神々しい。ただ、以前より参道が長くなった様な気がする。駐車場も、第 5 まではなかったぞ。出雲そばは、絶対昔の方が旨かった。

渚ウェイでは、こっぴどく飛砂にやられた。至る所に「飛砂注意」という看板が立っていた。何のことか分からなかったが、やられてみて初めて解った。ゴーグルが要る。

帰りは出雲ドームの横を通り、北神立橋渡った。上流の河川敷に、出雲 GC が見える。ここには、取引先の専務さんからよく連れて来て頂いた。「前田君、トランクには必ずゴルフバックを入れて来いよ。」と言われたものだった。学生時代に、遊びでやっていたことが役に立ったのだ。それがなければ、無能な営業マンの私に、専務さんが声をかけてくれる訳がない。取引してくれるはずがない。「一芸は身を助くる」の見本だった。

懐かしさで目が潤み、斐伊川を渡る。だが、感傷に浸っている余裕はなかった。また背後から、突風と雷雨が迫って来たのだ。3 日も雨に降られるのは初めてである。

9 号線に戻り、5km ほど進んだ所で雷雨がひどくなる。沿ってある荘原駅舎に避難した。雷は頭上まで来て、雨はザンザン降りだ。まだ 15:00 前で、先の玉造温泉まで行っておきたいところだが、もう濡れたくないし、ごろごろドカン恐怖だ。潔く、止めにした。

荘原は、日本三大美人湯である「湯の川温泉」の玄関口だ。一風呂浴びて行きたいが、1.5km 奥にあり天気も悪いので、そのまま松江まで列車に乗り、東横インにチェックインした。

松江の夜も寿司だ。「紅べこ」という店に入る。古い暖簾をくぐると、仕込みをしている女性が目に留った。ショートカットの髪に、キリリとねじり鉢巻を締めている。ちょっと古

いが、マラソンの有森選手をより美形にした顔立ちだ。一瞬、見惚れた。女性にも使えるかは分からないが、「鯨背」という言葉が似合う板さんだった。30 台半ばだろうか。

食べる前から当たりである。鼻の下が自然と長くなり、「味はフツウでもいいや」という気分させてくれた。なんたって、女性の寿司職人さんは初見なのだ。

カウンターが 7 席、テーブルが 3 つの店は、古いが庶民的だ。品書きを見ると、どれも安い。昨日の東京亭の半額以下だ。「回転寿司と同じ値段で食べられる!!」というキャッチにも頷ける。

注文は、女将さんお勧めの「お任せ 15 カン¥2500-」にした。何が出てくるか楽しみだ。旦那さんが仲居さん役で、飲み物や赤出しを運んで来た。

握りがすばやく、まな板の上にどんどん並べられる。そのしなやかできれいな手が目に入るもんだから、つつい箸が止まる。食べるのが追い付かなかった。

ネタは並～中程度だが、サザエや蟹みそ、なまこ(この時期にあるのか)等があり、大満足だった。15 カンあれば、腹も上々だ。

生ビールは大 2 杯とし、日本酒に移る。利き酒 3 種を試した。「しゃくなげの詩」、「三位の局」、「隠岐の誉大吟醸」、いずれも隠岐酒造だ。どれも旨く、甲乙をつけるのは野暮というものだが、私は、「三位の局」がフィーリングオールライトだった。コクがあり、口の中での膨らみ加減が抜群だ。やや甘口か。

カウンターには私一人だけで、女将さん旦那さんを相手に、たくさんの四方山話をした。メに「のどぐろ」の一夜干しをいただき、気分絶頂となった。山陰=のどぐろ、方程式だ。

最終日は、列車で荘原まで戻り、9 号線に沿って米子まで、50km 余りのランを快調にこなした。さすがに、最後だけは天も微笑んでくれ、穏やかな一日だった。

今回は、浜田～大田 60km をカットしたが、福岡県赤間から鳥取県米子まで 4 県に跨る、今までで一番長い旅だった。毎日毎日、数々の心に残る出逢いがあった。「不撓不屈」の精神なんて微塵もかけらもない、重戦車の潔さ(?)が生んだ必然の結果ではないだろうか。明日吹く風に、偶然は有り得ないような気がする。